



元気っ子

No 347 ながさわ保育園

園長

中瀬 弦 偉

こちらの「元気っ子」ではなるべくご家庭における育児において、お子さんとのかかわりや、いわゆる「躰」に対するエビデンスになるようなことなどをテーマになるべく分かりやすく、また実践しやすく書かせていただくよう心掛けています。

今月は保育園に通うことの意味を含めて、ご家庭の育児と保育園の保育の違いなどのお話をさせていただこうと思います。

まず入園（入所）のタイミングについてです。日本には「三歳児神話」というものがあります。これは、子どもが三歳になるまでは、母親は家庭で子育てに専念すべきであり、そうしないとその後の成長や発達に悪影響を及ぼすという考え方です。いまだに信者は一定数おられるようですが、これはすでに1988年に「科学的根拠なし」と明確に国が否定しています。そして、現在は、東北大学の研究発表等にもありますが、一般的には保育施設の早期利用は子どもの発達を促進すると言われていています。その理由としてボウルビイの愛着理論の誤解などもありますが、一番は「少子高齢化社会」です。近年は様々な研究により、乳幼児の発達のメカニズムが解明されており、子ども同士の関わりこそが子どもの発達を促すことが明らかになっています。三歳児神話が成立していた時代はまだまだ地域に子どもが溢れていて、自然と同年齢・異年齢の「子ども社会」がありました。その中で子どもたちはトラブルを解決したり、協力したり、貢献したり、されたりと様々な人間関係を学びながら育ちました。

しかし、現在はどうでしょうか。少子化、核家族化で地域の人間関係が希薄になってきています。社会背景等どうにもならない部分もありますが、子どもの成長は待たなしです。家庭で日常的に乳児期から子ども社会を経験できる方以外は少子社会において保育施設の利用は子どもの成長発達に不可欠と言えますし、学童期以降の人間関係をうまく乗り越えていけるでしょう。

このように、保育施設の位置付けは意図的に作り出す「子ども社会」だということが見えてくるかと思います。そしてここで特に子どもたちが学ぶのは「社会」「集団での行動」「規則」「道徳心」「人間関係」などが中心です。

それに対してご家庭の育児の役割で大切になるのが「躰」です。子どもに対する「言い聞かせ」や「けじめ」などですが、「躰」「言い聞かせ」と言っても、子どもの権利条約を無視するような、何かを強制するようなものであってはいけません。きちんと子どもと向き合って、対話を通して子どもの気持ちを受け止めながら伝えていくことが大切です。そのためにはまず、子どもの話にきちんと向き合うことが必要です。「アタッチメント（愛着）形成のための見守る子育て」の中に「子どもは何かものを与えれば喜ぶのではなく、気持ちをわかってもらうことを望んでいます」とあるように、子どもは自分の気持ちを（理不尽なものであっても一旦は）受け止めてくれる大人と愛着形成をしていきます。これが「躰」「言い聞かせ」の大前提です。もし我が子が話を聞かずお困りでしたら、まずはここから始めてみてください。保育の中でもこういった場面はありますが、ご家庭でのお父さんお母さんの役割は大きいです。

ご家庭の育児と保育園の保育の歯車がうまく回ると子どもがグンと成長する姿を見られると思います。